



あかばね国、
潜入記 201



小日向 薫

世の中、彼の地では、飛行機は平気で落ちるし、落とされる。此方、原発は破裂し、ビルは飛行機により、崩壊される。いくらモノ余りの世の中とはいえ、はい、壊しました。なくなりました。で、新しいものが必要でしょ。これも買え、あれも買え。ほんの一握りの金ほしい派の人々のために、庶民の命は紙風船となっている。乱暴な世の中だ。

近頃は、どういう訳か、自然災害も多発する。環太平洋地域では、巨大地震が起こり、それに伴う大津波災害が引き起こされる。

赤道に近い地域では、低気圧が大きく発達して、暴風雨により、海岸付近の居住者は、住まいを根こそぎ持って行かれる。

はたまた南半球の彼の地では、コーヒーブレイクのため入ったカフェで、隣に座っていた人に人質にされる。あげく、頼みもしないのに、銃弾を浴びる。犯人は、誰かに命令されているのか、はたまた自発的に行っているのはわからないが、世の中、トンデモな行動を行う人が多すぎる。

安価な旅行代理店のツアーだからとしても、こんな場面に遭遇する観光は、まっぴらである。巻き添えで、死んでから遺族が受け取った金は、自分では使えない。小銭でも、使い切ってから死んだほうがはるかにましだ。

なにしろ、世界中で物騒な事件、事故が多発する時代となったのだ。その時々、裏の支配者たちのパワーバランスによって、テロや地域戦争が起こされる。いつ、何処で起こるのかは能天気な庶民には知る由もない。

まあ、これからの時代、何も知らされない庶民が海外旅行に行き無事に帰ってこられる保証はない。内地の土を踏みしめるまでは、そして、自宅玄関のドアを開けるまでは、自分が、ロシアンルーレットの当たり玉とされないことを祈るばかりだ。

2015年。それでも、日本列島に、ことしも春が来た。

こぶしが咲き、木蓮が咲き、菜の花が咲いた。そして、東京では3月下旬、待ちに待った桜の開花の時を迎えたのだ。

たぶん、日本人の遺伝子に刻まれているのであろう。桜を愛でて思う、この春を感じる独特のワクワク感。縄文、弥生、古代日本人の血が騒ぐのだ。

なにしろ、心浮かれる時節となった。できるならば、安価で、より安全に、旅をして、酒を飲み、日ごろのストレスを解消したい。

ストレスの解消ができれば、病気の予防となり通院も減り、医療費も減るのだ。医療費が減れば、自分も助かるし、嫁も助かる。また、医療関係の既得権益者を除いて、国も助かるのだ。

ウジウジ、チマチマ暮らして不健康となり、挙句の果ての医者通い。こうして、無知な庶民は薬付けにされる。医者を信じ、投薬を処方され、見知らぬ、既得権益者を助けるよりは、飲み食いをして、居酒屋に金を使おう。顔見知りにも金を使っておけば、後でいいことがあるかも知れない。

自分で働いて得た金だ。美味しい物を食って、人と語らい、ストレスをためない。これが長命、健康の秘訣だ。

旅に出たいが、時間もないし、使える金は限られている。それでも、ウキウキしたい。できれば、事件事故に巻き込まれることなく、時節を楽しみたい。

そんな庶民の希望を叶えてくれるところがあるのだ。あなただけにそっと教えましょう。知ってるって？でも、そこは、本当に奥が深い地域なのだ。何度訪れても、また新たな発見があるのだ。知的好奇心を持って、歩き回り、疲れたら居酒屋で一休み。うまい酒と肴をいただいて、身も心もリラックス。健やかに暮らしていきましょう。

そうだ。都内にある「あかばね国」(北区赤羽1丁目)を訪問してみよう。ここなら、旅費も安く、何しろ、近い。その上、朝から吞める店舗もあって、食べ物も旨い、安い。さあ、「あかばね国」に潜入だ。

東京都の北の端にある「あかばね国」は、入国に際して、パスポートはいらない。小旅行には最適だ。ありがたいことに、日本語が通用するし、日本円が使用できるので両替の手間がかからない。

ただし、そこでの花見は、期待できない。赤羽小学校にある数本の桜の木を除いて、地域内に樹木が少ないからだ。近くには、桜の推奨スポットがあるのでおいおい紹介しよう。問題は、桜を鑑賞してから呑むか、飲んでから見るかの選択だ。自分の場合は、1日で、それを何度も繰り返す。何しろ、とことん日本の春を堪能するのだ。

そのかわり、ほんのりサクラ色に染まった酔客の笑顔は、この町のいたるところで昼夜を問わずに満開だ。

そこは、東京ドーム数個分ほどの広さの地域に、「赤羽小学校」の学校城下町として発展をした小国だ。そこは、老若男女が等しく楽しむことのできる、衣食住の環境がすべて揃ったワンダーランドなのだ。

念のため、身分証明書か、保険証くらいは万が一を考えて所持して行こう。そこには、立派な病院もある。飲みすぎて、前後不覚になっても、行き倒れになっても大丈夫。飲食店街の中に病院が配置されていて、どこの店で飲んでいても、匍匐前進の距離で、病院にたどり着くことができる。まさに、至れり尽くせりといった感じ。

さあ行こう。「あかばね国」へ。

この国に入国するには、JRならば京浜東北線、埼京線、湘南新宿ラインなど「赤羽駅」で停車する列車に乗車し、同駅で下車する。東口改札口を目指す。

階段下に駅前ロータリーが見えたら、体は、左方向へと歩みを進める。小さな信号の向かい側に鉄骨アーチに張り付けられた「1番街」というレトロな看板が目に入る。

昔はさぞ堂々としていたであろうことが想像できる「1番街アーチ」である。当時の写真を見ると、アーチの左右のビルも3階建てほどで「1番街」の看板と釣り合いが取れていたからだ。

それが、時の流れにより、左右のビルが改築された。ともに8階建てとなったため、「1番街」のアーチだけが、とても貧弱に映るようになってきた。

信号を待ちながら、その「1番街」の鉄骨アーチを見る。行く度にそれが、自分の中では、その昔、小淵恵三氏（群馬県選出の衆議員議員、のちの総理大臣）が、選挙のたびに語った有名なフレーズが思い出され、そのシーンが回想されるのだ。

小淵氏は、大きなビル（選挙に強い中曽根康弘氏）と大きなビル（同じく選挙に強い福田赳夫氏）に挟まれたビルの谷間の小さなラーメン屋であると例える。いつも選挙（地盤や看板の差）では苦戦を強いられていると、自分を揶揄していた。それでも氏は、官房長官として「年号は、平成

です」と、告知。のちに、総理にまで昇りつめた。

その鉄骨アーチは、およそビルの3階建てくらいの位置に、鉄のポールで「1番街」(縦幅、およそ2m位)の看板はかかっている。この道は、8.4m道路なので、看板の横幅も8m以上はあるのだろう。

「1番街」看板の「1」は、赤色の洋数字で、ボーリングのピンのように。また、「番街」の文字は白色の漢字になっている。

このゲートを通過すると「あかばね国」の領域だ。ちなみに、1の数字は、「あいちゃん」というマスコットキャラクターネームがつけられ、イラスト化までされている。

「あかばね国」のおもな産業は、域内、三百店以上に及ぶ飲食業だ。これらが日々、狭い地域でしのぎを削る。温故知新を求め集まる酒好きや、朝酒、昼酒、安酒を求め来る近在民や、東京勤めの川口、浦和など埼玉南部の県民が途中下車をして集う。

これに対して「あかばね国」の受け入れ態勢は昼夜を問わず万全だ。彼らが落とす飲食代金により、その国の経済は支えられている。赤羽小学校を除き、これといった観光施設も遺蹟も持たないのだが、古びた町全体が醸し出す雰囲気は日本人の哀愁を誘っているのだ。

地域人口、およそ三千人(赤羽1丁目、平成22年)。

宗教は、日本古来の大自然崇拜教となっており、特段の宗教を勧誘、強要することもなく、住民は争いごとを好まない。酒の上でのいさかいはあるのだが、他国と違って宗教的な対立や深い思想がないので、争いが大事になることはない。まあ、この国も日本人のDNAを受け継いで概ね大人しい。国としての、銃器や火器などの武器は所持しない。しいて言えば、押しかける客をいつものように捌く手馴れた店主、従業員の捌きのテクニックが武器なのか？

「1番街」商店街を北に歩く。両側に古びた3階建ての長屋的な建造物が続く。ほとんどが飲食店である。直進50メートルほど先の左角に、TVロケでよく登場する、鯉とウナギの店「まるます家」という有名居酒屋店がある。ここが「あかばね国」における銀座4丁目の交差点にあたる

この十字路の右角は、果物が店先に豊富に陳列されている八百正総本店である。右に曲がれば、20メートルほど先に東京都北区立赤羽小学校の正門が見える。この小学校正門の右手前が、いつも人だかりができていて有名なおでんの立ち飲み屋さんだ。

飲み屋街の1等地の部分に小学校がデンと鎮座しているのである。そして、小学生たちの黄色い声が聞こえてくる。このスチエーション、初めて訪れたものは間違いなく唾然とさせられるのである。

自分たちは、校庭で体育の授業を受ける生徒を目の前にして、昼間から果たして酒を飲んでいても良いのだろうか。古い教育を受けた者ならば、こんな気持ちが頭をよぎることだろう。

なにしろ、ウィークデーの午後5時までにはこの地に到着ができれば、多数の飲食店利用客と、これまた下校する多数の小学生が混在して商店街を闊歩している姿が目撃できる。

小学生の登下校路が、すべて飲食店街のどこかを通り抜けなければならない構造なのである。

この小学校には、出入り口が防火防災の退路として、東西南北に設けられている。普段は、東側の通用門と西側の正門の2か所を出入り口として使用している。東側の通用口から出入りしても、そちらも赤羽中央街と呼ばれる商店街なのである。つまり、生徒たちは、必ず、どちらかの商店街を通らなければ学校にはたどり着けないし、家には帰れないのである。

このため、小学生の下校時には、摩訶不思議な酔客と小学生の mismatch に遭遇することになる。なんと、小学校の周囲の四方八方路に飲食店街が形成されているからである。TVなどで有名な立ち食いおでん屋の軒先が、赤羽学校の正門なのだ。下校時ともなれば、混み合うおでん屋の酔客たちの群れを左側に目視しながら、ランドセルを背負った小学生たちが、その正門から続々と排出されてくるのである。

この町の歴史からいうと、赤羽小学校は、明治35年12月14日には、すでにこの地に存在していた。かたや、飲食店街の形成は、昭和21年に赤羽駅東口駅前への復興を目的に商店会が結成され、昭和27年に、現在のような街並みに落ち着いたとされている。

このことから見ても、この地は、はじめに「赤羽小学校」ありきで形成されことは疑いようのない事実なのだ。これは、赤羽小学校の東側と北側の道路形態を見れば一目瞭然だ。はじめに、赤羽小学校の敷地が決定し、その周りに生活道路が設けられ、そこに住居や店舗が集まってきて商

業地として発展していったことが見て取れる。

同小学校の東側と北側の生活道路は、学校の配置と外の本町通り、都道445号線の位置の関係から、小さな三叉路が多く取り入れられた構造になっている。五角形（あかばね国の全体）の地形のところに長方形の小学校を入れたために、東側の地区が、三角形状になってしまったのだ。

これほど赤羽小学校は、当地の街づくりに影響を与えているのだ。この昭和レトロな飲食店街「あかばね国」が現在、これほど繁栄しているのは、赤羽小学校がそこに存在し続けてくれたおかげだといっても過言ではないだろう。

言ってみれば、赤羽小学校こそが、この小国のランドマークなのである。つまり、赤羽小学校の学校城下町として「あかばね国」の飲食店街は発展したとみて間違いがないだろう。それだけに、この町のランドマーク、赤羽小学校の歴史を紐解かずして「あかばね国」は語れないのだ。

赤羽小学校は、明治9年8月12日に東京府第四中学校第17番小学校として岩淵山、曹洞宗鳳生寺の末寺の福寿院という寺の敷地内に開校された、寺子屋である。

町の古老に聞くと福寿院は、現在の赤羽駅の駅舎の川口寄りにあったとされる。明治16年1月、鉄道路線敷地にかかり宝幢院(赤羽3丁目4)に校舎を移転した。

明治35年12月14日より現在地。当時の住所は、東京府豊島郡岩淵町大字赤羽字長島178番地。翌36年、赤羽大火により、校舎消失。この大火事、原因は、強風で蒸気機関車の煙が、軌道近くの民家の藁葺屋根に燃え移った。現赤羽地区の民家や公共施設の四分の三が火災により焼失したとされている。

建てたばかりの赤羽小学校も罹災したわけだが、幸運にも基礎部分が使用できたために、すぐに再建がかなった。

これ以降は、大正12年9月1日の関東大震災に際しても、赤羽地区は奇跡的に火災が起きずに被害が少なかった。このことから、焼け出された他の近在の地区から、赤羽に人口が流入し、この地の人口は増加していった。

昭和6年、岩淵尋常小学校に改称。昭和7年10月、王子区が成立。16年、東京府立国民学校に。18年、東京都立王子赤羽国民学校に改称。20年、戦時教育令の発令により、学業の停止。軍隊が駐留することとなる。

一方、先の大戦では悲しい出来事があった。20年2月25日、日曜日、午前8時30分。赤羽空襲で敵機B29が襲来、当地を攻撃。続いて、4月13日、午後11時から明くる14日の朝にかけてB29が襲来。西北部に焼夷弾が投下され、地区の78%が焼失した。

8月10日、浮間、袋町、清水坂、東北線路上、稲付などに50キロ爆弾が投下され、地区の住民13万人が被災した。B29、100機P51戦闘機50機が襲来。いたるところ火の海となった。8月15日、終戦。

昭和22年3月15日、それまで35区あった区分けが整理統合され22区となる。これにともない、滝野川区と王子区が合併して北区となる。同年、板橋区より練馬区が分離して、東京23区（特別区）となる。

この、北区の誕生により「北区立赤羽小学校」と、なるのである。

36年、それまでの木造校舎を解体。37年5月7日、鉄筋校舎1期が完成する。38年1月7日、2期工事が完成。同年、12月4日、全館完成を見るのである。

軍事工場や、軍関連施設が集積し、憎き鬼畜米軍の攻撃目標とされた赤羽地区である。その中で、赤羽小学校は、度重なる空襲から奇跡的に戦火を免れたのである。それだけに、これからも赤羽小学校は、「あかばね国」のランドマークとして君臨し続けなければならない義務があるのだ。

さて、当地を「あかばね国」と呼称していることに対して、「なぜ？」と思われる向きもあると思うので、その説明をしていきたいと思う。

「あかばね国」として自分が勝手に括っているのは、赤羽1丁目の10番地から67番地までの地域である。赤羽小学校を大きめにグルット取り囲んだ変形五角形の地域だ。

この地域、駅東口側から俯瞰的に眺めることができるとするなら、ちょうど、とがった山型の食パンのような形をしている。赤羽駅東口高架下より、右に進み新興のララガーデン(赤羽スズラン通り商店街入り口＝赤羽2丁目)までが食パンの底面にあたる。距離にして2百数十メートル。

下面右角にある宝石店「つつみ」を左に折れる。東本通りと呼ばれる道で、右に少し歩けば、赤羽消防署、赤羽郵便局がある。道路沿いを北に進み、赤羽岩淵駅までが食パンの右の辺にあたる。この距離が一番長い。五百メートルはあるだろうか。

北本通りを赤羽(環八)交差点まで歩くと屋根のてっぺんにあたる地点だ。この距離、百五十メートルほど。ここから、変則五差路を、左折。都道445号線でJ R高架に近い、宝幢院(真言宗智山派=医王山東光寺)まで下る。この辺が左側の屋根の終わりの部分といったところ。この間の距離百メートルと少し。

今度は、J Rの高架に沿って南下する。バス通りの本町通り(都道460号線)を下り、元の駅前に戻る。グルッと1周を歩いても距離にして、1キロメートル強か。変形五角形の地域に、居住者、およそ三千人が生活している。

今、歩いてきた赤羽1丁目10~67番地の外縁部分は、半分くらいの部分で6階から8階建てのビルに改築が終了している。これがまるで、区画整理の進まない飲食店街の「あかばね国」の城壁のように感じられるのだ。欧州、地中海地域の旧市街の街歩きTVの旅番組の見過ぎで、いつしか自分の脳内で両者を結びつけ、当地をTV街歩きの体で、一人悦に入って後ろ手にくみながら、街歩きを楽しんでいるのだ。

さて、飲み食いに訪れる客でいつでも繁盛している「あかばね国」ではあるが、今後については、懸念材料もあるのである。それは、当地の建物のほとんどが築後50年以上を経過し、老朽化していることである。利用客の安全や、地震、火災を考えると、もうすでに建て替えの時期を過ぎてしまっているのだ。

当地では、現在、建築基準法にかなった耐震基準に適合した建築物は、たったの7%に過ぎない。逆に言えば、他店の営業を妨げずに、耐震耐火の基準に沿った建築を行うことがこの密集地には、いかに難しいのかを物語っている。

ここを、所有や使用する権利者の50%は、再開発に賛成だ。だが、個人が、密集地に建て替えを行うとすると、隣接店などに対しての休業補償や、入り組んだ場所の建て替え作業のために、難工事が必至である。建築のやりにくさに伴う建て替え費用の上昇などを考えると、ほとんどの者が個別の建て替えには、二の足を踏んでしまうようだ。

加えて、権利者の高齢化もあり、なかなか背中を押せないなどの難しさもあるのだ。また、権利者の40%の人々が、再開発に際して、これまでの古臭い昭和の面影を残したものにしてほしいと訴える。これが、容積率の拡大を阻害してしまう。結果、建設コストを押しあげる。こうして、地域権利者の会合の話し合いはまとまらず、今日に至っている。

結局、再開発は地元全体の合意が必要で、一斉に取り壊し、一斉に建築を行う。この方式でなければ建て替えは出来ないことはわかっている。だが、誰しも思うことだが、日銭が欲しい経営者の気持ちや、再開発によるこの町のイメージの変更。一定期間の地域閉鎖後の「あかばね国」の利用者の客足の減少を考えたときの先行きの不安。

会合の結果、答えは現状維持勢力が優勢となる。こうして、ずるずると当地区の再開発事業が同意に至らず今日に至っているようだ。

一方、「あかばね国」を取り囲んでいる城壁にあたる1周約1キロメートル強の外縁部分の建て替えは、かなりの部分で終了しているようだ。冒頭、「1番街」のアーチの件で述べたとおり、アーチの敷設されている左右のビルは立派な作りで、完成形だ。

それだけにアーチが頼りなく貧弱に映るのである。これが、見る人が見れば哀愁を感じ、郷愁を誘うのかもしれない。

「あかばね国」を取り囲む地域は、変形の五角形である。南北およそ400メートル、東西300メートルに囲まれた地区の外周部のほとんどは、新たな耐震基準を備えた建物に改築されている。

密集した「あかばね国」の旧市街的な飲食店街を取り囲むように、外郭部の再開発は、比較的容易に完了したのだ。

問題は、「あかばね国」の旧市街の再開発である。少し目線を上げながら、歩いてみればわかることだが、メインの通りを中心として、かなりの建物が木造モルタル風3階建ての長屋づくりになっている。

東京ドームとほぼ同じくらいの広さで、ここに赤羽1番街商店街振興組合に所属するものとしなない店舗、あわせて100店舗以上が生き残りをかけしのぎを削っている。

現行、この商店街の中でも、再開発に待ちきれない店主が、建て直しを行っているところが数件見受けられる。立ち飲みのおでん屋のあるシルクロード商店街周辺で、旧権利者が、そこを売却して、新たな者がその権利を購入しての建て直しなのだろう。

当事者にしてみれば、経営権を購入したのだから、新たに建て替え、新たに商売を始めようとする事は当然のことである。しかし、こうした個々の選択が、後々火種になるのだろう。今度は、すでに建て直した者と、そうでない者で、地区の再開発が決まった時のその補償などをどうするのかという問題である。

いずれにしろ、当地の再開発は利害がからまりすぎて、なかなかまとまることはないだろう。むしろ、建物の老朽化が進行して、各店舗を利用する客の安全性が阻害される事案が発生した時が一斉立て直しのチャンスだ。「あかばね国」は、各店舗が老朽化して危ないと、マスコミが騒ぎ、利用者の不満の声が増大した時が、再開発の後押しとなりそうな気がしてならない。果たして、そう遠くない時期にそれは訪れるだろう。

「あかばね国」内の問題点を指摘しておく、環境面に対しての対策が遅れている。一つは、緑がないことだ。この町に唯一ある小さな三角公園に、外周を囲むように樹木が植えられているが、そのほかにほとんど樹木は見かけない。

それに、春先以降になると、飲食店街の中心部近辺では、ハエが大発生するのだ。若いお姉さんが騒がないのが不思議だが、潜在的に不衛生として評判を落としていることも考えられる。このハエの一掃は、「あかばね国」を挙げて取り組むべき課題である。

「あかばね国」の域内の通路や道路の説明と、店舗の紹介をほんの少々していこう。

赤羽駅東口を下車し、高架下の信号が見えたら、高架線路に寄りそって南北に通じている道路を、「本町通り」（都道460号線、中十条赤羽線）という。北（宝幢院から赤羽駅に）から南に抜ける一方通行路のバス通りである。

その本町通りの小さな横断歩道の前に、判りづらいが一間ほどの小路がある。「お菓子の種屋」と書かれた垂れ幕がかかっているところの路地だ。タバコ屋が目印で、店に沿って歩ける小路がある。右折れすると、南北に、OK横町と呼ばれる小路である。「1番街」のアーチを入ってすぐビル裏を左に折れても、その先、右折れでOK横町が始まる。

左右は、小さな飲食店が密集している。この小路は、全長がおおよそ8、90メートル。そのうちの駅に近いほうの通りの呼び名をOK横町という。この間60メートルほどの距離か。小さな四つ角を過ぎるとその先の30メートルほどが名店街と呼ばれる名称になる。左右に9、10店舗ほどの飲食店が営業している。

この通りの初めから、終わりまでが、逆コの字のつくりになっていて、名店街の突き当りを右に曲がれば、1番街商店街通りの中ほどに出てくる。1番街商店街に出たところの右側に伊勢屋という和菓子屋がある。

串団子のみたらしと、あんこがともに1本、110円。1個の団子の粒が大きく、餡も多めにつけられている。このため、とても食べ応えがある。店先に、椅子が二客しつらえてあり、座って食すことが可能だ。

椅子に座り、斜め左前を見やれば、昔懐かしいペットショップ「ノザワ」が目に入る。金魚、熱帯魚、小鳥、小動物を1匹売りの昔スタイルで販売している。生き物商売は、生体管理が大変でホームセンターなどでは、数匹をまとめてビニール袋に入れて販売する手法も増えている。それだけに、頑張って永續をさせてほしいと願う店だ。

OK横町に入る路地はほかにもあるので、説明をしておく。はじめに、タバコ屋に沿って細い道があるとしたが、見逃してしまうかもしれない。なので、赤羽駅東口に併設のホテルメッツ前の信号を渡り、高架下の角に「北区赤羽区民事務所」という行政施設がある。この前に立って、本町通り道路の向かい側を見てみよう。ここからなら、確かに、右前方にたばこ店、左前方に、OK横町に続く小路が見えるのだ。

北区赤羽区民事務所を高架下に沿って進む。左手にスポーツジムが見えたら、一方通行のバス通り、本町通りを横切ろう。直進すれば、右にOK横町、左に名店街がある。7.7m道路。その先右角が、まるます屋、左角は、たばこの自販機がビルに沿って並んでいる。左右が、1番街商店街通り。これを通り抜けた正面が、この町のランドマークの赤羽小学校の正門である。

この本町通りを渡った位置から、赤羽小学校を見渡した景観がドーンと一直線に突き抜けていて、まるで神社の参道を見る様。すこぶる恰好良いのである。本当に「俺がこの町のランドマークだ」として、小学校が主張しているように見えるのである。

OK横町のその先は、明店街と呼ばれるほんの短いLの字型の飲食店街。ここに、10店舗ほどがひしめく。OK横町側から見て、右角は、すし屋だ。

この明店街の左2件目に有名な鰻、鳥料理の「川栄」がある。居酒屋放浪記の吉田類や、その女版の倉本康子。また、ミジコ博士でジャズ屋の坂田明先生の色紙などが搜せたので、好きな方は確認をどうぞ。

ここのウナギは、たれが甘くなく自分好みの味である。付け合せの香の物の味が最高。小鉢の中に奈良漬け、きゅうり、茄子、大根がそれぞれ2切れ。肝吸い付きで、お会計は2200円。昼に、車で行ったので残念ながら、酒は飲めなかった。遅いランチであったため、混雑は一段落しており、入店できた。このため、着弁までの時間、メニューや店内の造りをいろいろと観察できたので満足した。

1番街商店街と呼ばれる通りは、この町のメインストリート。道幅、8.4メートルで駅前の「1番街商店街」アーチから、この町の守護、真言宗智山派、宝幢院（赤羽3-4-2）のある都道445号線までの、およそ400メートルの南北に延びる道路。

旧市街と勝手に呼んでいる赤羽小学校近辺の南部飲食街密集地。これを過ぎれば、この通りの左右の建物もかなりの割合でマンションや商業ビルに建て替えが終了しているのが見て取れる。

さらに、宝幢院方向に進むにつれ、飲食店はまばらになってくる。賑わう建て替え困難地の飲食店利用者は、別な趣味や嗜好がない限りなかなかこちらまでは、足が向かないのだろう。

このため、飲食業よりも、住居や社屋としての街づくりがされていると感じられる。

東京の北の玄関、赤羽駅に近いという利便性と、域内は思ったよりも静かな場所で、住むにも申し分がない。外側の城壁ビルに騒音をガードされているため、その内側の範囲は多分に静寂なのだ。

1番街商店街通りも中程まで来ると、高層のビジネスホテルなどもある。建築基準が緩和されたのを受け、高層建築として客室を増やし、ビジネス客や近隣スポーツ施設利用者や観光客なども、割安感を前面にして広く利用者を受け入れている。

駅近の飲食店密集地を除けば、確実に町の在り様は住宅地へと変化しているのだ。建築基準が変更緩和され、建築物の容積量が増したことから、中層建物と呼べるマンションがすこぶる増えている。

さらに、この道を北進すると都道445号線に突き当たる。信号のある三差路である。左に30メートルほど進むと、戦前には赤羽小学校があった宝幢院（真言宗智山派、医王山東光寺＝赤羽八幡神社の別当寺であった）が道路の右側に見える。そのまま、JRの高架下をくぐり右（師団坂通り）に曲がる。目の前は、六角堂風の造りの八幡蕎麦「赤羽屋」という日本蕎麦店である。立派な店構えで、一度は寄ってみたい風情を持った店である。

桜を愛でたい向きは、一度、八幡蕎麦側にわたり、右に歩く。7、80メートルで赤羽八幡神社の鳥居が道路の右側に見えてくる。鳥居の手前の信号のないT字路を左に曲がる。これでも、都道445号線だ。少し上り坂を我慢して、二つ目の信号まで歩く。この間、300メートルほどあるがひたすら我慢。2つめの信号は、交差点になっており、左に800メートルほど下っていくと、赤羽駅の西口だ。ここを右に折れる。この道は、赤羽北3丁目の諏訪神社を過ぎて、環状八号線、さらにその先、川口方面に抜ける道だ。

この道の両側が桜並木の緑道になっている。信号を右に曲がり、桜並木のトンネルをのんびりと歩く。やがて、右側に「赤羽台さくら並木公園」という北医療センター(総合病院)に併設された小規模な公園が現れる。

桜のきれいなところである。上り坂の交差点の信号から数えて四つ目のところにある。医療センターの入り口にあり、ベンチもあり、トイレもあるので十分な休憩ができる。ベンチに腰を掛けて桜を愛でれば、疲れも癒される。

ここは、北医療センター(昔の軍事施設跡地)の西側に作られた公園で、まだまだ若い公園であるが年を経るごとに、桜も育ち、見応えのある公園に変貌していくことだろう。

この桜並木は、その先の下り坂の途中にある諏訪神社の交差点まで続く。小腹がすいたら、その公園の前に「和泉屋うなぎ店」(住所上は、北区桐ヶ丘2-11)がある。平日限定ランチで、先着10名に限り1260円でウナギ定食が食べられる。通常品は、並が1995円から、特上4200円まで。日曜、祭日が休みだ。

赤羽地区の山側(赤羽台や赤羽西など)を探訪するときの注意点として、決して、小路を右左折しないこと。これが鉄則。慣れるまでは、遠回りでも、太い道を選択しよう。方向感覚に自信を持っている方なのだが、ここでは、いい年をして何度も迷子になっている。

八幡蕎麦「赤羽屋」を正面に見たら右折れ。高架の線路際に沿ってだらだら坂を上ってゆくと右側に「新幹線が消える」とされることで有名な赤羽八幡神社(旧、赤羽根村社)の鳥居が見えてくる。

この神社、JRの高架を包み込むようにして高台に存在している。このため、本社に参拝するには、師団坂に沿った左側の舗装された急こう配の車道で上るか、いったん東日本旅客鉄道赤羽変電所と書かれた看板の高架下をくぐり、右側からの階段で上るかの二通りであるが、どちらも

急だ。高架下の変電所では、JRの職員が普通に変電所の業務をこなしているのが目前に見える。神社に参拝しに来た身としてはなんだか不思議な感じだ。

この赤羽八幡神社は、かつて宝幢院までを含む敷地を有していたという。だが、関東ローマ層のふちに沿って、神奈川、東京、埼玉と南北に鉄道を伸延させたい日本鉄道(私鉄、JRの前身)の懇願に神社側が協力をし、線路施設のために敷地を提供したのだ。このため、現在ではそこそこの大きさの神社となっている。

それでも、参拝を済ませ四方八方を見回せば、その眺望の良さは抜群である。古の権力者がこの地に神社を作ったことにも理解ができる。権力者は、いつの日も、日当たりのよい、東南の角地の高台を好む。この神社からも、縄文、弥生時代の人々の生活の痕、古墳が発見されている。力のあるものは、いつの世も一等地に住めるのだ。

近くに、中里貝塚(北区上中里2-8)があり、ここから大きな牡蠣と蛤の貝殻が層をなして発見された。この遺跡は、専門家の鑑定によると、ただ貝殻を廃棄した場所の貝塚ではなく、入手した牡蠣や蛤の貝の身を火入れ、加工する場所であったことが判明した。

それによると、縄文中期のおよそ4000年前の当地は、上野、飛鳥山、赤羽台の武蔵野台地の東北端に位置し、縄文期は海であった。

遺蹟は、長さ1キロメートル、幅100メートルの範囲に及んでいる。東京湾奥の海岸線沿いの砂浜に、1.6メートルくらいの大きさに、深さ1.3メートル穴を掘り、その内側に粘土を張り竈のようにしつらえた。そこに、焼き石などの熱源で貝を加工した跡がみられるのだ。貝を日持ちさせ、商品として交易した。また、牡蠣はすでに養殖をされていた可能性もあるのだとか。

古の古墳の住人は、当然、これらの交易品を着に、夜ごとに酒宴を繰り広げたことはやぶさかでない、夢想する。

もと来た道を引き返す。1番街商店街を「まるます屋」の角まで戻る。左に曲がると正面が、赤羽小学校の正門だ。正門のすぐ手前右側に、南に延びる短いシルクロード商店街という通りがある。薄暗く狭い通りである。入口より2軒目の右側。人だかりが見て取れれば、そこが人気の「丸健水産」という屋号のおでん屋さんである。おでんのネタを売りながら、店頭でも立ち食いをさせる。

店の前に置かれたテーブルでの立ち食いとなる。店の者に「お任せ」を注文すれば、お酒が一杯におでんが3、4個セットで料金は700円である。半分ほど酒を飲んだ後に、おでんの汁をワンカップに継ぎ足してもらい、「おでんスープ割り」にして残りを飲むのが、当地のスタイルであるとか。初めて訪れた者たちは、この儀式で盛り上がり、他店に流れたのち、仲間内で、このことを酒の肴として楽しんでいる。

この暗い路地が、シルクロード1番街という道幅2間の直線50メートルほどの路地である。今では、半数以上が飲食店となっているが、シルクの文字通り、戦後の焼け野原に生地問屋が集まって、商店街を形成した。今でも、この路地の中には、名残の服飾、洋装店も営業している。

細い道の途中にも、右に曲がる路地が2本あり、どちらも、目ぬき通りの1番街商店街に抜けられるようになっている。この辺りが、ディープで活気のある狭小店舗の密集地。老朽化の進んだ、木造3階建て危険個所だ。

いの一番に再開発を急がなければならない地区である。ただし、当地は道が狭いため地権者や権利者全員がセットバックに同意しない限り、再開発が行われることが決定してもそこに建築される建物は、消防法の関係で3階建てまでに制限がかけられるのだ。

シルクロード1番街を南進。突き当たりは左右に行けるのだが、小学校のある左に曲がる。すぐの右側に立ち食いのやきとり屋さんが目に入ってくる。煙と人ばかりで、すぐにわかる。

間口半間の店舗で、店内はあるのだが、いつも電気が消えていて中がよく見ることができない。その軒先の小さな焼き台を使い夫婦二人でやきとりを売っている。店先での立ち食いはOKなのだが、酒を飲みながらの立ち食いはご法度。

やきとりは、どれも1本80円。焼き台の前に置かれたステンレス製のパッドに、焼かれたやきとりが次々と置かれ、客は、好みのそれを好き勝手にとり、食す。食べ終わったら、本数を自己申告。本数、掛ける80円の明朗会計。持ち帰りは、10本以上の注文者には、タレが容器に入ったものを無料でつけてくれる。小振りだが、どれもなかなかイケル味だ。

そのまま直進すると、左側に赤羽小学校の南門が見えてくる。右側の軍艦ビルには、業務用のスーパーが入っているのが見える。普段は使用されていないこの南門だが、学校整備の際に大型重機の出入りさえも対応できる大きな門構えとなっている。

この南門から校舎内を覗き見る。左手に中央に正門が見える。真正面が校庭。その先が小さな

北門。右側の奥から手前のほうにかけての四分の三ほどが校舎。その校舎の手前に年代物であろう棕櫚の巨木が並列に3本ほど植えられているの見える。

この棕櫚の巨木について、東門近くにいた学校のおぼちゃん先生に、突撃取材を敢行してみた。いきさつを問うたのだが、自分は「赴任が最近なのでわからない」とされた。

別の日、同小学校出身でバス通りに店舗を構える和菓子店「喜屋」の店主にも聞いてみたのだが、「確か、自分の時代にはなかった」としているので、1963年以降に、植樹されたものであろうと推察できる。それにしても立派な棕櫚の木であるので、当地を飲み訪問した際は、酔い覚ましを兼ねて、一見するのも話のタネになる。

今、赤羽小学校の東南部(右角の部分)にいる。ジュエリー「ツツミ」の内側にあたる場所だ。角を左に曲がり、小学校の東門側に回ることとする。この東門側の地区が別の意味でまた、レトロでディープな場所なのだ。

今でも、昔スタイルの看板のかかったスナック・バーがかなりの割合で点在しているのである。唇を真っ赤に塗りたい、酒焼けの声を聞いたオールドママフェチにはたまらない場所。

ママ、チーママとも高齢なので、いける機会があればなるべく早めに行くことをお勧めする。なにしろ、スナック好きには垂涎の地区である。灯ともし頃が待ち遠しい。

赤羽小学校に隣接する東門側の通りと、北門側にある商店街の通りの名称は、なぜだか、どちらも赤羽中央街商店会である。北門側の赤羽中央街商店会は、1番街商店街のペットショップ「ノザワ」から、東に向かって東本通りまでの200メートルほどの区間。対する南北に延びる赤羽中央街商店会は、学校東門通りとその右隣に同じく南北に延びる通りの3路にて構成されている。

「赤羽霊園」という、漫画やネットで有名な、若者に人気のカラオケスナックも学校東門の通りの一つ右側の道を北進したところにある。わからないときは、いったん1番街商店街に戻り、団子の伊勢屋の先のローソンを探す。ローソンを左に見て、その先の右角にライオンビルという大きなビルを右に曲がる。

その先左側に、この街唯一の児童公園がある。三叉路に出来上がった内側の空き地を有効利用したような作り。1辺が50メートルほどの三角公園であるが、児童遊具は、雲梯が1台、スベリ台が1台、大型脚立型遊具が1台。このほか、ベンチに、ブルーシートのかぶせられた砂場、トイレも完備されている。小さな敷地に、遊具を入れられるだけ設置した感じが否めない。この

ため、子供たちが思い切り走りまわるスペースがとられていない。それでも、子供たちは黄色い声をあげて楽しんでいるのだから嬉しい。公園の3辺には、かなりの植物が植樹されている。しかし、残念ながら、桜の木は植えられていなかった。

この三角公園を超えて、歩いてゆくと1分ほどで、右側にカラオケ「赤羽霊園」はある。

これまで、小学校や、小学生の話ばかりであったが、実は、この街には大人の夜の学校もあるのである。いま、角を曲がってきた「ライオンビル」が大人の夜の総合キャンパス。各階ごとにフィリピンパブや、キャバクラなどが入居している。

そして、カラオケ赤羽霊園の手前にある「第三ヒロビル」も、8階建ての1棟丸ごとが大人の夜の学校となっている。この2つの総合大学は、日本をはじめ、アジア各国や、ロシア系のフレッシュレディーが夜の国際交流をしてくれる。課外授業がありなのか、なしなのか。福沢さんを多数連れて、訪問するのもよいのでは。

学校東門の通りを、小学校に沿ってそのまま北に向かって歩いていけば、だんだんと商家と商店、そして、住宅が混在してくる。

町内を北に向かっていく道は複数あるのだが、どの道も北西方向(赤羽小学校から見て、左斜め前方へ進む)にしつらえてあり、都道445線に垂直にぶつかるように設計されているようだ。学校東門通りのひとつ右側にも北進して445号線にぶつかる道がある。その道の中ほど右側に、今は斎場となった福寿院(もとは、現在の赤羽駅付近にあったとされる。赤羽小学校が初期開設された寺)がある。

前出のペットショップ「ノザワ」は、赤羽小学校の北門側の赤羽中央商店街と、1番街商店街にぶつかる角にある。1番街商店街を駅方面から歩き、「まるます屋」を越え、和菓子の「伊勢屋」を左に見て、右のペットショップ「ノザワ」のほうに曲がる。曲がった道が「赤羽中央街」になる。

「ノザワ」の2軒先左側が不動産店。その先が、「北部セントラル病院」となる。診療科目は総合病院に準じており、急患なら、日曜でも診療可能。この情報を頭に叩き込み、安心な気持ちで、飲み食いを行えばそう悪い酒になるはずもない。この安心拠点を有し、この国は、訪れ来る訪問者の急な病や、事故による怪我の対応などにも万全の態勢を敷いているのだ。

右手にすぐに小学校が見えてくる。真ん中あたりに小さな北門がある。かまわず歩く。小学校の

角が小さな5差路。直進すると両側は飲食以外の店舗が多く営業している。この間だいたい100メートルくらいの距離か。

商店街の右側は、木造3階建ての、1番街商店街の中心部と同様の長屋的な構造になっている。左側は、それぞれが独自に別の時期に建築を行ったように見てとれる。2階建てと3階建てが混在した商店になっている。

この赤羽中央街の左角には、飲料メーカーの託児所などもある。その他、時計店、家具店なども見受けられる。

その先、右角のお菓子の「種屋」は、コンビニ風の店舗。店先や、店内に昔風のゲーム機が置いてあり、子供たちの情報交換の場所となっているようだ。ランドセルを背負った小学生が楽しそうに出入りしている。

また、この辺り一帯が、スナック、バーが点在する地域である。5差路を50メートルほど直進すると「あかばね国」の外郭、東本通りに突き当たる。右に向かうと、ララガーデン方面。左へ行くと、赤羽岩淵駅方面となる。

この国「あかばね国」の域内の紹介は、ザッとこんなところ。赤羽小学校と同じくらいの面積の飲食店を中心とした繁華街が、同小学校に寄り添うように存在し、しかも街全体が繁盛している稀有な街なのだ。

なぜ「あかばね国」と言い続けるのかを説明しなければ、もういい加減にうんざりされることだろう。

それでは、解説をしていこう。行政区域の住所表示で言うところの、東京都北区赤羽とよばれているところは、1丁目から3丁目に区分されている。

この中でも赤羽1丁目だけに、際立った特長がみられるのだ。赤羽小学校のある1丁目の範囲の中だけで、おおよそ日常の生活が事足りる生活インフラが整っているのだ。

この五角形に囲まれた狭い地域の中だけで、子作りから子育て、教育に就職、あげくは、葬儀に至るまでが同じ町内ですべて事足りてしまうのである。

いわゆる、「ゆりかごから墓場まで」（一九六〇年代、小学校の社会科で習ったソビエト連邦の話）が、小さな赤羽1丁目という行政区域の中ですべて、それらが完結しているのである。

赤羽1丁目の五角形の地域内にある業態、業種を挙げていく。

郵便局、コンビニ、ダンスホール、空手道場、ラブホテル、宗教施設、法律事務所。病院、葬儀社、葬祭場、花屋。託児所、赤羽小学校、予備校、区立の老人集会施設。

酒問屋、酒小売、工務店、電設設備会社、警備会社。呉服屋、みそ店、時計店、カバン店、旅行社、プラモデル店。製氷会社、ガラス店、金物店。

水道工事業、文具店、マッサージ店、宅配便サービスセンター、貸衣装店。板金加工所、塗装店、製麺所、畳店、メガネ店、印房店、理、美容店、クリーニング店。古書店、菓子店、和菓子店、不動産店、和洋中華、その他アジア系飲食店、サラ金、喫茶店、スナック・バー、一般中小会社。等々、およそ暮らしに必要な店舗や、生活インフラが整っているのである。

この400メートル四方にも満たない赤羽1丁目に住所を持ってしまえば、電話1本で生活の困りごとが解決されてしまう環境がそろっているのだ。これが、この街を「あかばね国」と呼びたくなる所以である。

さて、五角形に囲まれた赤羽1丁目「あかばね国」の快適なアメニティー環境を紹介してきた訳だが、この地が現在、商売繁栄しているのも、赤羽台に鎮座する赤羽八幡神社に守護されておかげである。このことを忘れてはならない。赤羽八幡神社により、この地は1200年前より武運長久の神様方（勝負ごとに強い）によって守られているのである。

赤羽八幡神社の歴史によると、創建されたのは、平安時代にさかのぼる。50代、桓武天皇の時代の話。延暦3年(784年)、坂上田村麻呂の東夷征伐の際、当地に陣を張り八幡三神（応神天皇＝誉田別尊、比売神、神功皇后）に勧請をした。田村麻呂は、当時の武官で副将軍として東征し、のちに征夷大將軍となる。801年、敵対する奥州「えみし」の討伐に成功。このことから、死後、朝廷より従二位を贈られる。山城の国に將軍塚が造られ、国家守護の力と頼まれた。

赤羽八幡神社の祭神は、（品陀和氣命＝ほんだわけのみこと＝応神天皇が主神、帯中津日子命＝たらしなかつひこのみこと＝応神天皇の父、息長帯比売命＝おきたらしひめのみこと＝応神天皇の母）の三神が祭られている。

また、境内社として、赤羽招魂社、古峯神社、北野神社、御嶽神社、阿夫利神社、大山神社、住吉神社、稲荷神社、疱瘡神社があることから神社としての社格は上位のものがあると思われる。

なお、古峯神社(栃木県)は、西の熊襲、東の蝦夷を平定した日本武尊が主祭神。日本武尊は、東西の合戦の際に戦場では、火を治め、また、海上では、風雨を治め味方に勝利を導いたとされた。こうした云われから、主祭神の御神徳は火除けの神様として、ならびに、海難防止の神様として祀られることとなった。

赤羽八幡神社は、先の大火により、社が焼失してしまった。このため、社殿再建後は、日本武尊をお祀りする古峯神社に請願、境内社として火除けの神様をお祀りすることとして、火災防止も祈願できる社となった。

八幡様のそもそもは、大分県の宇佐市にある宇佐神宮が、全国の八幡神社の総社。誉田別尊(応神天皇)が主祭神で、比売大神(ひめのおおかみ)、神功皇后(じんぐうこうごう)の三神が祭られている。比売大神とは、同地に古くからあった神様で、実在したか否かはわからない。神功皇后は、応神天皇の母親。勇ましく戦ったとされる方で、そのこともあって、源氏の守護神と崇められ三神で軍神(戦神)として祭祀されている。

赤羽八幡神社は、明治の初めころは、4000坪の敷地があったとされる。それが、上州で生産される生糸の輸送のため、国策で高崎から横浜までの鉄道輸送ルートが構想される。この結果、明治16年、上野一熊谷間の鉄道施設により、地続きであった宝幢院と分断された。同年7月28日、日本鉄道という私鉄会社によって、上野一熊谷間の鉄道が完成した。王子、浦和、上尾、鴻巣、熊谷と新駅が誕生する。こうして、王子近辺には、製紙工場や軍需工場が集積するようになった。

赤羽駅が誕生したのは、この少し後の明治18年3月1日。品川一赤羽間が開通したことに伴い新駅となった。当時の赤羽駅は、現在の駅から300メートルほど川口よりのところにあったとされる。高架下の北区赤羽区民事務所から本庁通りを北進する。突き当りに、宝幢院がかなり大きく見えてくるあたり高架下一帯が、昔の赤羽駅ではないかと睨んでいる。

住所表示では、赤羽1丁目63番地と64番地の辺りにそれらしい痕跡がみられるのだ。本町通りの進行方向の左側に「鮎金」と書かれた2階建ての古びた店舗がある。ここに、左に抜け切る20メートルほどの小路があつて、レトロな飲食店が数件営業している。

中でも、小路を抜けきった左角の「米山」という焼鳥屋さん、この街で、超がつくほどの有名店。この1区画が時代から取り残された駅裏という情景を醸し出しているのである。昔の駅の改札口が近くあったことを夢想してしまうのである。

また、初期の赤羽小学校のあった曹洞宗、福寿院も、この線路上に存在したとされる。それが、鉄道施設の計画にかかり福寿院が移転。その結果、赤羽小学校は、宝幢院へと移校となった。当時はまだ、学問は寺子屋で受ける的な考えが強く、寺院などに小学校が作られたとされる。

赤羽（赤羽根）の地名の云われは、赤土のある場所、粘土質の土壌の場所とされている。このため、赤羽と呼ばれている地域は、国内に何か所もあるのだとか。

当地、赤羽は、関東ローム層の露出した地域で、武蔵野台地の東の縁にあたる。横浜、東京、埼玉を走行する京浜東北線の左右では、地質が全く違うという。

赤羽駅西側の西が丘地区は、関東ローム層が堆積して地盤が良好、このため、高級地とされている。反対に、駅東側は、荒川の堆積層で土地は低く、地盤は柔らかい。さらに、隅田川沿いにあった工場群が地下水をくみ上げたために地盤沈下が起こり、水害も過去には、度々起きている。荒川対岸の川口地区を含めて、治水対策に苦労を重ねてきた地区である。

赤羽1丁目の東側の外縁、北本通りの向かい側に「赤羽岩淵」という東京メトロ南北線の地下鉄の駅があるのだが、この一角だけが北区「岩淵町」という町名になっている。2面が北本通りに面して、背後が隅田川となっている地域。広さは、赤羽1丁目とほとんど変わらない小さな町だ。

この町は、明治22年に東京府北豊島郡岩淵町として誕生した。その昔は、武蔵国豊島郡岩淵郷として存在した。岩淵宿、稲付村、赤羽根村、袋村、下村の江戸岩淵五ヶ村と呼ばれ、赤羽の八幡神社がその五ヶ村の総鎮守とされていた。

FJ-USER岩淵宿は、江戸より日光御成道(日光街道)の最初の宿場町として、栄えた。しかし、時を重ね、鉄道が町の西側を通過し、赤羽駅が誕生した。この結果、人の流れと物流は、鉄道に移り、宿場町の役目を終えたこの町は衰退をたどった。

しかし、この町の住民の町名にこだわるプライドの高さから「岩淵町」の名前は残った。1番地

から41番地までしかない小さな町であるが、元岩淵1丁目住民の宿場町であった「岩淵」のプライドが、赤羽根村と呼ばれていた地名の名称に変更されることはかなわないとする町名変更反対運動が町名を存続させたのである。

岩淵町は、1丁目と2丁目があったが1964年からの町名保存運動が実り、1972年に岩淵1丁目と岩淵町として残った。元の岩淵2丁目は、現在の赤羽1丁目、2丁目の全部と、赤羽南1丁目の一部に分割され、町名変更された。広さは、今の赤羽駅南口の先まであり、赤羽消防署、赤羽郵便局も地域に含まれた。当然、「あかばね国」も、元は岩淵町であったというわけだ。

岩淵町は、地域が小さくなりその名称をとどめた。しかし、岩淵の冠は、他の地域のも残している。岩淵水門の赤青の2基にしても、住所は志茂である。また、赤羽3丁目に第四岩淵小学校、西が丘1丁目に第三岩淵小学校がある。赤羽2丁目には、赤羽岩淵中学校が志茂より移転してきた。同校は、赤羽中学と岩淵中学が平成22年に統合し誕生した。経営破綻した赤羽2丁目のダイエーの跡地に平成26年に新校舎が完成し、移転した。このように、他地区にいくつも「岩淵」の名を残し、そこがかつて宿場町で隆盛を誇ったことを証明している。

岩淵町22-21番地にある八雲神社は、その昔、岩淵宿の総鎮守として創建された。八雲神社境内の社殿手前の右側には、岩淵町民が運動で勝ち取った「岩淵町 町名存続之碑」が建立されている。

赤羽岩淵交差点(正式には、赤羽交差点)近くに、東京の地酒「丸真正宗」の小山酒造の酒蔵がある。いまでも、地下150メートルから汲み上げる水は優良で、酒造りに適しているという。

この交差点から、北本通りを荒川に向かってすぐのところに、小山酒造の親族が経営する「小山酒店」という昔スタイルの酒屋さんがある。地下水の話は、その店主から聞いた話である。

ここでは、丸真正宗のワンカップが、227円。1合瓶が、257円で販売されている。飲んでみると、飲み口は、スツキリとしていてスルツと喉もとを通り抜けていく感じがする。飲みやすいため、飲み過ぎには注意が必要な酒だ。

八雲神社は、荒川の橋のたもとを右に曲がって2、3分くらいのところにある。参拝するには、手前の小路を右に曲がらないとならない。岩淵町は、町内の道路が狭く入り組んでいるので、赤羽岩淵駅から八雲神社へ行く場合は、このルートが判りやすい。

この荒川沿いの道を、もう少し下流に歩いてゆくと、町名が、志茂5丁目と変わっていることに気が付く筈だ。岩淵町は、それほど狭い街なのだ。

それでも構わずに歩いてゆくと、左手前方に土手沿いを上る場所があるので、迷わず上る。橋を超えて歩いていけば、そこが「岩淵水門」だ。正面が、今は使用されていない「赤水門」である。右手先に見えるのが隅田川にかかる「青水門」である。

水門の手前に、国土交通省荒川下流河川事務所という建物があり、この中に荒川知水資料館が併設されている。川の生物や、治水の歴史などを無料で展示している。

この建物の脇の土手沿いに、桜の木が10本ほど植えられており、花見時にはレジャー客でにぎわう場所だ。トイレも河川事務所内にあるので困らない。

岩淵町は、小さな町内にもかかわらずに寺院が三院、集合して所在する。これも岩淵が宿場町として栄華を極めたことの名残であろうか。宿場町に寺院が集まっているのは、東海道の品川宿(北品川周辺)あたりでも見ることができるので、そう想像してしまうのだ。

西日が落ちるまで歩き回って、赤羽駅にたどり着くことができた。このころには、酔いもすっかり醒めてしまっている。のどが渇いてもいるし、止まり木にも留まりたい。

東口駅前の大衆酒場「まるよし」のガラス戸をあける。カウンター左手前が空いている。ラッキーだ。

先客に教えてもらった、ちょっぴり酸っぱいバイスハイにキャベ玉の小、もつやき4本をオーダー。一息を付きながら、さて、この後は、どこで飲むかを考える。その前に、バイスハイのお替わりをお願いします。三杯飲んでも2000円で十二分におつりがくるところが、この店の良いところだ。 (了)